



純情漂流

夢枕 獏



純情漂流

夢枕 獏



角川書店

純情漂流



夢枕 獏

1992年11月5日 初版発行

発行者／角川春樹

発行所／株式会社角川書店

東京都千代田区富士見2-13-3 〒102 振替 東京3-195208

TEL 営業03-3817-8521 編集03-3817-8451

印刷所／大日本印刷株式会社

製本所／株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取替えいたします。

©Printed in Japan ISBN4-04-883327-8 C0095

純情漂流
目次

序 漂泊の力学

5

第一部

一章 漂泊論

12

二章 天竺てんじく夢想

42

三章 玄奘げんじょう行路

66

四章 人間原理

77

五章 壁を殴りにゆく

94

第二部

一章 虚空の鶴

120

二章 ユーコン有情うじよう

186

三章 純情氷河

235

離章 漂泊の終わりと始まり

259

あとがき

269

119

口 絵

①チョー・オユーへ向かう道。この氷河を抱えた巨大な谷で、ぼくは迷ったのだ。しかし、不思議なことに、どこで迷っても、この美しい、白い雪の峰は見えているのだった。②なんという……思わず声を失うほど大きな氷河だ。③ティンリへゆくには、5000メートルに近い峠をいくつか越える。そういう峠にさしかかるたびに、ぼくらは車を降りて、高度順応のために、歩いたり、立ち止まったりして、呼吸を整えるのであった。④薄青い氷河の氷。これも、そうとうにでかいしろものである。⑤ブルー・ポピーだと思ふのだが……。⑥この花の名前はわからないが、あちこちで見た。⑦ヤクの背に荷をのせて、キャラバンをする。⑧ネパールの街角を曲がり、路地の奥の奥へ入ってゆくと、このような像に必ず出会う。⑨目ざめたその朝、テントには薄く昨夜の雪が氷りついて、触れると、ぱりぱりと音をたてた。

カバー・扉・口絵・本文写真 夢枕 獏
装幀・写真レイアウト 山口昌弘

序
漂泊の力学

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

宮沢賢治^{みやざわけんじ}「春と修羅」序

人は、何故、遠くへゆこうとするのだろうか。

人は、何故、ここではない向こう、水平線や地平線の向こうの、まだ見ぬ彼方へ遥ばるとした視線を向けるのだろうか。

人——というより、ぼくの裡には、抜きがたい、そういう彼方への憧れがある。旅、と、そう呼んでもいい。

漂泊、と、そう呼んでもいい。

読み残した物語、あるいは書き残した物語、そういう物語の続きや結末へはせる想いと、そういうものへ憧れる気持とは、どこかに共通するものがあるようである。

どこかわからない無辺彼方に、物語の結末は預けられている。

その結末、物語のその続きを捜しにゆこうとする行為が、ひとつにはぼくにとっての旅であるような気がする。書き終えない、あるいは読み終えないその続き、結末が存在するかもしれない彼方へ向かつて、その距離を埋めてゆく——それが、旅なのではないか。

旅でもいい、漂泊でもいい。そういうものへ、何が人を駆りたててゆくのだろうか。

旅には、不思議な力学がある。

たとえば、哀しみの深さ、喪失したものの大きさに合わせて、人は、遠い距離を動いてゆくもののである。旅の力学の中には、間違ひなく、そういうものがあるようにぼくには思われる。

ぼく自身で言えば、若い頃から、喪失のたびに、遠い距離を動いてきたような気がする。

たとえばひとりの女が、自分の傍からいなくなるたびに、じたばたしぬいて、自分自身にイ

ペントを課してきたのではないか。そのイベントが、実際の旅であつたり、あるいはあるひとつの物語を書きあげるといふ旅であつたりしたのではないか。

行き場のない体内の力をもてあまして、それこそ、齒を軋きしらせながら、ただ歩き続ける——そういう山を何度かやつた。

新しい物語を書くことも、まだ行つたことのない山に登るのも、ぼくにとっては、同様の力学の裡うちの行為であつたような気がする。

そして、そういう力学は、今もつて、ぼくの行動パターンを、どこか、根の深いところで支配しているようである。

かつて、二十三歳のおりに、ぼくはヒマラヤに出かけたことがある。

小説を書いてゆこうという覚悟がようやくできたかできないかの頃だ。

自分が何者であるのか、自分には何ができるのか、何もわからない頃だ。自分が、何をやりたがっているのか、そういうことすらも、わかつていなかったに違いない。

自分は、小説を書いてゆくべき人間ではないかという気負いや不安に、さいなまれている頃だ。何もわからないかわりに、未来の量だけは、ほとんど無限にあるかのように思い込んでいた。

やりたいことの、一番上の座は常に空白で、とりあえず、二番目をやっている——ヒマラヤへ行つても、小説を書いていても、いつも自分は今その二番目をやっているのだという意識が抜けきれなかったような気がする。一番目の座は、常に、空白のまま何ものかのためにとっておく。

今も、そういう意識は残っている。

なんだ、これは少しも進歩をしてないということではないか。

なんだかこれはどうも、そうとうに恥ずかしいことを書いているような気がする。

まあよろしい。

一度くらいは、そういう恥ずかしいことをきちんと正面から書いておく必要があるから、この連載を始めたのである。

ここで、この連載について、ことわっておかねばならないことがある。

これは、かつて、一九八九年に、『月刊PLAYBOY』誌上でやっていた連載である。一九八九年から、一九九〇年の春にかけて、四回にわたって書かれ、未完に終わったものだ。

その未完に終わった長大な『漂流記』を、時と場所をかえて、なんとか、完成させようという試みが、この『純情漂流』である。

その時その時、ぼくという書き手が抱えている状況を、そのまま正直に書いてゆきながら、夢枕獏という虚名を有した人間が、どのようにじたばたしながら四十代をむかえようとしているか、どのように変わろうとしているか、そういうことを書こうとしたのである。

連載を始めた時が、三十八歳であった。

連載を打ち切られた時が、三十九歳であった。

それから一年を経て、再びこれを書き始めようとしている現在、ぼくは四十歳になっている。世界も、ぼく個人も、まだ、当時と同じように混沌こんとんとして動いている。

その混沌を、混沌のまま、ゴッホの表現をかりれば、『掘り出したばかりの土の着いた馬鈴ばれい

薯色いもいろの“まま、それをここに書いてゆこう”と思っているのである。

前記のごとく、この連載の最初は、『月刊PLAYBOY』連載時のものに、あらたに手を加えたものになる。

書いているのは、二年前の自分だ。

その二年前の自分から始めて、現在の自分にたどりつこうという、なかなかどきどきすることとを、ここでやろうというわけなのであった。

自分は何者であるのか。

古代神話の英雄譚サウナガがそうであるように、旅というのは、自分自身を捜すための果てしない彷徨ぼろである、だいたいそういうことになっている。

自分のこけの一念でやってきた物語を書くことや、ささやかな旅を、そういう神話の英雄譚サウナガになぞらえるつもりはないが、いくらかは、そういう要素を、旅というものは含んでいるはずだと思う。

第一部

一章 漂泊論

7

ぼくは、長い間、考えてきた。
旅についてだ。

そして、自分は、旅にゆき旅に果てるべき人間であると、漠然と信じていた。

十代から二十代にかけては、ザックを担いで山を歩いた。ザックを担いで、ネパールやヒマラヤの山麓をうろついたりした。カトマンズの街には、世界中をうろつきまわったりしたあげくに、そこに集まってきたヒッピーたちがたむろし、動物やニワトリまでが、人と同じようにその街でうろろろとしていた。

見あげれば、雪のヒマラヤが見える。

街の中は、人の汗や動物の汗や糞や血の匂いでいっぱいだった。原色の仏教であるラマ教の寺院があり、ヒンドウの寺がある。そういう寺院の壁からは三つの眼が不気味にぼくを睨んだりした。カトマンズは、混然とした、仏教とヒンドウ教と、生き物の街であった。街の隅

にあるシヴァ神のリング（おちんちんのかたちをした石柱）には、まっ赤な山羊の血と、無数の花びらがふりかけられ――

本当に、カトマンズは不思議な街であつた。

帰らなくてもいい――

ザックを担いで旅に出る時には、いつも、そういう想いを刃物のように胸に秘めていたように思う。

ところが、いつの間にか、ぼくはそういう旅をしなくなった。

結婚をし、女房を持ち、子供ができたからである。

ぼくの旅は、帰ってくることを前提とした旅になった。いつの間にか、妻だとか子供とかいう荷を、ぼくは担ぐことになった。その荷があるための、どうしようもない不自由さはあるにしても、しかし肩にかかつてくるその重さは、不思議なことに、いやではなかった。

帰ってくるための旅――それはそれで男としての微妙な哀しみもあるかわりに、妙な満足感もまたあつたのである。

出発点へもどってくる旅――山や川や海を越えたあげくにたどりつく場所は、結局、自分の居る場所である。自分へ帰ってくるための旅だ。

いつの間にか、そういう旅をするようになった理由はもうひとつ、あつた。

小説が売れ出したからである。

山登りや、旅や、釣りや、そういうことのために使っていた時間に、物語を書く、ということがわり込んできた。会えないでいる女のことを考えたり、金がないためにバイトをしたりし

ていた時間を使って、ぼくは物語を書くようになったのだ。

望むところであった。

山や、女のためには死ねないが、物語を書くことによって、自分の肉体が蝕^{むしば}まれてゆき、結果としてそれで死ぬようなことになるのなら、それはそれでかまわないとさえ思った。

“ぶつ倒れるまで物語を書く”

それが、単純なぼくの望みだった。

最初の本『ねこひきのオルオラネ』が出たその頃、ぼくは、ひとつの発見をしたのだった。それは、

“山に登ることも小説を書くことも同じではないか”
という発見である。

その発見によつて、ぼくは、ひどく安心をした。

書くことで、山に登ろうと思った。

ここではない、向こうに行くことが旅であるなら、その旅を物語を書くことであることができるのだ。

それは、物語——小説を書くことで、ひとりの求道者たろうという決意であった。

ひとつの物語を書き綴^{つづ}ることが、ひとつの旅であった。その旅を終えれば、また次の旅に出る。前の物語でたどりついた場所から、また別の場所へと行き続けること。次の物語を書き続けること。永久に書き続けること……

それが、ぼくの旅になった。